
A P H ~ 王記 ~

メープルシロップ味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

APH ～王記～

【Nコード】

N5868P

【作者名】

メープルシロップ味

【あらすじ】

耀たち兄妹が治める京国。敵国との戦争に、民は疲弊し、国は敗戦直前だった。

——そんな中、耀はある決断をする……。

設定

↓世界観↑？

・九の国とその他の小さな国で構成された剣と魔法の世界。
それぞれの国に“聖地”とよばれるところがあり、神子と呼ばれる人が守護している。

ただいま米国が勢力をのばし、どこそこで戦争してる。

・王族が不老。ある程度成長すると、それ以上身体は成長しない。
これには個人差があり、一部の国では成長が止まるのがはやいほど魔力が強いとされる。

↓登場キャラ↓

基本的にアジアン5ですw

・王耀《ワン・ヤオ》

京国の王。呪術や体術に長け、魔力は京国で一番強い。この世界の王族の中でも年長者にはいる。

長く生きすぎて結構身体のところそこが痛かったりする。

京国の民と弟妹（とご飯）のことを第一に考え、少々がんばりすぎることがある。

・菊《キク》

京国の第二王子。耀の弟で、軍事面の仕事をしているが、よくいろいろな書類の処理を押し付けられる。いつもは静かだが、ときどき荒ぶる。

・勇洙《ヨンス》

京国の第三王子。耀の弟で、雑務や耀の仕事を手伝っている。菊に書類を押し付けるのは主にこの人。明るく、楽家。耀のことを慕っている。

・香《コウ》

京国の第四王子。耀の弟で、魔法や呪術関係と諜報関係の仕事をしている。魔力は耀の次に高い。いつも冷静でポーカーフェイス

ス。ひとりで行動することが多い。

・小梅《シャオメイ》

京国の第一王女。耀たちの妹で、京国の神子。一番年下だがしっかり者で、菊のことを慕っている。気が強く、優しい女の子。生まれてからずっと京の城から出たことがないので、外にあこがれていた。

・シナティ

耀が500歳くらいときに召喚したなにか。猫のような被り物をしていて顔がみえないおっさんみたいな人物。耀のことを慕っており、突っ走ってしまう耀を心配する。魔力は人でないためか異常に強く、空間移動を得意としている。

まずはここまでノシ

ほかのキャラはまたこんだ（殴

設定（後書き）

これから連載するかもしれない小説の設定の切れ端（氏
とあるD S iの機能でかいてたマンガを小説にします（あくまで予
定）。

ここにかかれていない設定や登場キャラは、小説内やこのあとがき
のところで明らかにしていく予定ですwww
・・・続くといいなあ・・・。

一、溜め息（前書き）

口調や呼び方が違うかもしれませんが（汗
誤字脱字と一緒にスルーしてください）（汗

一、溜め息

耀は書類に目を通し、溜め息を小さくはいた。

机から少しはなれて立つ弟の無表情な顔からは何も読み取ること
はできない。

「わかったある。さがるよろし」

このところ米国が勢力をのばし、あちこちに戦争をふっかけて
は自分たちの領土にしている。ひとつの広大な領地をもつ国として
独立したのはほんの百年ほど前だというのに、ここまででしゃばつ
てくるとはいいい度胸である。

米国は今、育ての親ともいえる英国、そして耀たちの京国に攻め
込んでいた。その同盟国とも戦っているわけであるから、米国の力
は相当なものといえるだろう。

「老師、これからどうすんですか？」

香は一礼してドアノブに手をかけると、何か思いとどまったかの
ように振り返った。

「俺のそこはおちたも同然・・・次は勇洙だと思う的な」

「そんなことわかってるね。夕食の時までには決めておくある」
はつきりいつて、なにも策は浮かびそうに思えなかった。

米国との戦争で京はいっぱいいっぱいだった。国のももとの軍
では足りず、徴兵までも海に面した部分はあつという間に侵略
された。米国は凄まじい勢いで京を蝕んでいる。これ以上、耀は国
民を犠牲にしたくはなかった。

「わかりました」

香は耀の少しやつれた顔を見て一礼すると、今度こそ耀の書斎を
出て行った。

しばらく書類をもったまま何も考えずばおつとしていた耀は、大
きく溜め息をはいて立ち上がった。

書類を放置し、部屋に設置されたソファに身を投げ出す。クッシ

ヨンを抱きしめ、大きく溜め息をはいた。目をつむり目の疲れを癒す。

「溜め息をすると幸せが逃げちゃうアルヨ」

突然降ってきた男の声に、耀は重たい瞼を上げる。

「シナティ・・・幸せも何も・・・」

ソファの背もたれに手をつき、覗き込んでくる白いネコの被り物。ニヒルな笑みを浮かべたその顔は、表情こそ変わることはないが何もかも見透かされているような気をおこさせる。

耀はまたしばらく険しい顔で何かを考えるように目を閉じた。

このまま戦い続ければ、民にますます負担を与える。なんとしても戦争を終わらせなければ・・・。

「主、考え中に悪いアルが、ワタシ、さっき米国に行ってきたアル」
「ッ?!・・・それで？」

「神子を見に行ってみたら兵隊に見つかっちゃったネ」

「わざとあるな？何やってるあるか」

「まあ聞くよろし。神子には会えなかったアルが、米国の王には会えたネ」

それから聞かされた言葉に、耀の目は大きく開かれた。

再び目を閉じた耀。二人しかいない部屋は、重い空気に包まれる。物音ひとつしない部屋で、耀は何かを決意したようにゆっくりと目を開いた。

「シナティ」

その瞳には、

「頼みがあるある」

あきらめと、・・・悲しい決意に色が浮かんでいた。

豪華な料理が並べられた大きなテーブル。見た目は豪華でも、食材はそれほど高級な物ではなかった。量もそこまで多いわけではない。民が貧困しているときに、王族だけ贅沢する訳にはいかないという耀たちの計らいである。

そんな夕食の時間。広いテーブルが大きく音を上げた。ガチャガチャと食器が鳴る音と共に怒声が響く。

「どういうことですか！！そんなこと、この国の民は望みません！！」

「しかし戦いが続くことも望まないあるよ」

顔を歪めて叫ぶ菊に、耀の抑揚のないだるそうな声が返ってくる。

「私も菊兄と同じヨー。この人たちは負けず嫌いだからネー」

小梅は肉まんを持ったまま耀を睨む。声がいつもより刺々しい。

「はにきく、はんあえあおうんあえー」

そう言う勇洙は春巻きを口にくわえられたままなので、何を言っているのかよくわからない。困ったように眉をハの字にしているが、頭に生えたくせ毛の顔はポコポコと怒っていた。

「はあー。冗談じゃない的な？」

溜め息をはいてそういう香。

「そういうと思ってたあるよ」

弟たちの反応に頬杖をつく耀。うつすらと、その顔にはうれしうに微笑みが浮かんでいた。しかしその笑みもほんの一瞬のもので、次には元の無表情に戻っていた。

（そろそろあるな）

耀の心は重く沈む。ガシャンと食器がなる音がした。

「ッ・・・これはっ」

菊たちが苦しそうに突っ伏している。ドクン、と張り裂けそうな心臓。左胸を押さえ、菊は耀を見た。

「料理に薬をいれたある。もう長くは持たないね」

冷たく言い放つ耀。菊は沈み行く意識の中、冷徹な笑みを浮かべた耀を捉えた。

「せいぜい我を恨むよろし」

「兄・・・上・・・」

一際強い痛みに、菊は暗い闇の中に意識を引きずり込まれた・・・。

）
続
く
）

一、溜め息（後書き）

うわー、な作品↑ ホントに続き出してしまった（）

見ていくうちにテンション下がる気がしますorz

小梅の「菊兄」呼びさせたかったんです（）氏

ああ、だめだあ、文才ほしい！

ドシリアスなこの小説。これからどうなっていくのやら・・・orz

z

二、王の従者（前書き）

口調が違ってる可能性があります（汗

二、王の従者

少し肌寒いくらいの涼しげな風がふいた。

寒い冬が終わり、降り積もった雪も溶けきっていた。生えそろうた草がチクチクと肌をくすぐる。ゆつくりと目を開ければ、真つ青な空に輝く太陽が瞳に飛び込んできた。

鳥のさえずりを聞きながら目をならし、はたらかない頭で清々しい空を眺めた。

「ここは・・・どこ、ですかね・・・」

ふと、気になって声に出して誰に向けてでもなくきく。己の口から紡がれる声はひどくかすれていた。本当にここはどこなのだろう・・・。青い空はいつもどおりだが、静かな、人が動き回っている様子もない場所にただ横たわる機会はめつたにない。国の重役である男・・・菊は王族として、常に国のことをあれこれ考えていなければならなかった。こうしてただぼーっとするだけの時間を過ごすのはいつぶりだろう。再び何も考えることなく空を眺める。涼しい風が漆黒の髪を揺らし、草を舞わせた。

自分はどうしてここに来たのだろう。そう何気なく疑問に思ったとき、記憶の最後を飾る冷徹な笑みを浮かべる兄の顔が頭によぎった。

菊は勢いよく上体を起こし、自分の周りを見回した。大きく見開かれた瞳は、自分の近くで横たわり静かに寝息を立てる弟妹たちを捉えた。ゆつくりと規則正しく上下する胸をそれぞれ確認し、ほつ、と胸をなでおろす。

「起きたアルな」

突然、自分が幼いときから聞いている男の声が聞こえた。

黒い闇が虚空に渦巻いている。その中から、白い被り物をした中年ごろの男性が出てきた。

「シナティ、さん・・・」

ガシャガシャと音を立てて、剣やら薙刀やら武器を落とすシナティ。

「あいやゝ、落としちゃったね。さすがに一日に何回も空間移動は疲れるアルナ」

菊は鈍く痛む頭をおさえ、なにやらごそごそと背を向けて作業をするシナティに疑問をぶつけた。

「シナティさん、私たちはいったい・・・」

シナティは無言で菊たちを見つめる。居心地の悪い思いをしていると、うめき声をあげて勇洙たちが起きだしてきた。

「みんな起きたアルネ」

「シナティ？何があつたんだぜ・・・？」

「・・・なんか、身体がだるいヨ」

「小梅は神子アルからネ。そのうちなれると思うアルヨ」

「？？はやく何があつたか教えてほしい的な。まあだいたいわかるんですけど」

「今からちゃんと教えてやるアルヨ」

シナティは胡坐をかいて座ると、語り出した。

「知つてのとおり、米国との戦争でこっちはボロボロだったアル。主がそれで悩んでるとき、米国が取引を持ちかけてきたアル。ま、込み入ってるから簡単に話すネ。結論を言つと、王族を4人と聖地をよこさないと完全に京を叩きのめすつて話ヨ」

静かにしていた4人が声をあげる。

「まだ口を挟むんじゃねえアルヨ。王族を4人始末して、残りのひとりに国を統治させようつてことアル。そっちのほうがアツチもいろいろと楽なんじゃねえアルかね。米も米で、けっこうたいへんみたいだったアルヨ」

「行つたんですね・・・あ、すいません。話がずれています」

「あはは、ごめんアル。米国の言うとおりにすれば京国の国民には一切手は出さないし、過酷な労働もさせないし重い税だってかけないつていう民には優しい条件だったアル。この条件を飲まないと総

攻撃をかけるって言うネ、飲むしかなかったアルヨ」

「それで俺ら殺されそうになった系なんすか？」

シナティがうなずく。彼は重い溜め息をつき、また話し出した。

「薬を入れたのはワタシネ。でも・・・このとおり、ワタシにはできなかつたヨ」

「先生は本気で私たちを殺そうとしてたの・・・？」

「・・・どうアルかね。おまえたち気付いてなかったアルか？あの部屋には米国の使者がいたアルヨ」

「気付かなかつたんだぜ。俺たちが気付けないなんて、只者じゃないんだぜ」

「まあ、その話はいいいアルナ。で、聖地アルが・・・さすがに国の核的な存在アル。素っ裸で渡すわけにはいかねえアルヨ。だから・・・」

そこで言葉を切ったシナティ。

気持ちのいい風が吹く。さわさわと草木の歌だけになっている。

しばらくして、また男は口を開いた。

「封印しちゃったアル」

「はああ?!」

誰よりも先に口を開いたのは小梅だった。ふらふらと立ち上がるうとして近くにいた勇洙に座っているよう止められる。泣きそうな顔で小梅は叫ぶ。

「あの子を封じたなんてそんなことできるはずない!」

「ワタシがチートなのは知ってるはずアル」

「だからってなんで?・・・あの子がかわいそうヨ!封印されるの嫌いつて言ってたネ、ひどいヨー!!」

神子は、聖地と人同士のように接することができる。聖地の言葉や感情を感じ取り、その意思を尊重し、王族や国民に伝えるという仕事をするのが神子である。

「完全に封じた訳じゃないアルヨ。力の大部分を使えないようにしただけアル。さすがに完全に封じちゃったら米国が怒るアルヨ。そ

れに、聖地は承諾してくれたネ」

「へ？」

目にたくさんの涙をためた小梅が驚いたように声を出す。

「話せるの？」

「ワタシ、チートネ。代わりに結構代償とられちゃったアルヨ」

「ああ。あの子、あれで結構欲張りだからネー」

安心したように、納得したようにうなずいた小梅はぱたりと倒れこんだ。

あわてた兄らにシナティが聖地のせいだと説明した。寝息をたてる小梅は神子だから、封じられた反動が来たんだという。神子は聖地と奥深くのところで繋がっているのだ。しかたがないことだと男は言った。

「さて、これからの事アルが、おまえはたち死んでることになるアル。この国、京にはいられないネ」

菊は、シナティの少し後ろに置かれている鞆とマントと武器を見た。そのままシナティに目を戻す。

「ワタシの言いたいことは分ったアルナ。じゃ、ワタシはもう行くアル」

「あの、どこへ？」

「うーん・・・主にはクビって言われちゃったアルしなあ・・・。実家にも帰るアル」

「そうですか。できれば一緒に来てほしいのですが・・・」

「子守なんてもうごめんアルヨ」

「申し訳ありませんでした」

気だるげだが、どこかうれしそうで淋しそうな声に、菊は微笑んで頭を下げた。香や勇洙の口にも笑みが浮かんでいる。しかしそれも、やはりどこか淋しそうだった。

シナティが立ち上がると同時に、先ほどと同じように黒い闇が虚空に渦巻いた。

「あ、いい忘れてたアルヨ」

闇の中に半分入った状態でシナティが振り向く。

「主、ちよつと変わっちゃったネ。おまえたちなら、国、取れるアルヨ」

「今のはどういう・・・?!」

菊の言葉を聴き終わることもなく、男は闇の中に消えた。

「シナティさん!!」

その闇も、やがて消えていった。

く 続くく

二、王の従者（後書き）

今年中に投稿できた！！ぎりぎりできた！！

でも行きたいとこまで行けなかったorz

あと会話文が多すぎるorz

来年も精進しますっ！！いつ終わるかわかんないけどがんばります！！

よければ、来年もよろしくですノシ

三、呪いのペンダント（前書き）

口調や呼び方が違う可能性があります。ご了承ください。

三、呪いのペンダント

米国から送られてきたペンダントをいじりながら、耀はソファに寝そべって天井を眺めていた。

『そのペンダントは、どこにしようとその場所を特定できるようにできてるんだ』

これを送りつけてきた人物の声で手紙の内容が思い出される。

「全く、憎たらしい奴ある。これじゃうかつに城を出ることもできねえじゃねえあるか」

このペンダントは包みを開けた瞬間、耀に呪いのように首に巻きついてきたのだ。厄介なもので、京国の中でも最強の魔力を持つ耀でさえ取することはできなかった。

今ははずそうと足掻いた結果、疲れ果てて休憩していたところである。

耀が大きく溜め息を吐いたとき、ちょうどシナティが帰ってきた。

「主ー、帰ったアルよー。あの子たちは今頃独国に入ったころネ」

「ごくろうある。でも、帰ってくんなくて言っただはずあるが」

「みずくさいアル」

拗ねたようにそう言ったシナティは、寝転ぶ耀の頬をツンツンと突付きながらしばらく耀をいじった後、どこか壊れ物を扱うように耀の頭を撫でた。子供扱いするなと言う耀にクスリと笑う。

「何年ここにいると思ってるネ。今更離れられないアルヨ。主、王耀、ワタシをここにいさせてくれねえアルか？」

「・・・それは、昔した契約とは別あるな？」

「もちろんヨ。契約金もたっぷりもらったアルし・・・もつとも、契約金のほとんどを聖地の封印の時につかっちまったアルがな。主がもう一回したいってならしてやらねえこともないアルヨ」

「遠慮しとくある。・・・これ、はずせるあるか？」

耀はしばらく考えるふりをした後、しゅしゅと言った様子でシナティにペンダントを見せる。

シナティはこれまでの千年単位の付き合いから、耀が内心喜んでるのを感じ取った。

「ありがとうアル。置いてくれるアルナ」

シナティは嬉しそうにペンダントを見た。しかし、すぐに残念そうに言う。

「悪いアルが、いくらワタシでもこれはムリアル」

ばつの悪そうな声のシナティに、耀は少しだけ目を見開いた。

いままで彼ができなかったことなどほとんどなかったのだ。改めて、耀は米国に対する危機感を募らせる。シナティはそんな耀を見ながら言葉を続けた。

「これは・・・米国の聖地の力が感じられるネ。あそこは、たぶん、あんま知られてないけど聖地の中では一番強いアル」

「そうあるか」

彼が絶対的に信頼するシナティの言うことだ。耀はシナティの言葉を受け入れると、静かに目を閉じ、クッションに顔をうずめた。

「シナティ、このとおり我は自由に外に出歩けないある。迂闊に抵抗すれば我の計画が水の泡になってしまうかもしれないある。これからこき使ってやるあるよ」

「お手柔らかにお願いするアル」

「考えとくよ」

コンコン、と、窓を叩く音がした。窓辺に一羽の伝書鳩がとまっている。米国からの鳩だ。

「シナティ、おまえはクビにしたことになってるある。できるだけ人前には出ないようにするよろし」

「了解アル。じゃあワタシはちっちゃくなって引き出しの中にも隠れとくアルヨ」

耀はこくりと頷き、鳩の持ってきた手紙を読むと、すぐに書斎をでて歩き出した。

米国の王と会談するため、そして、京国を守るために・・・。

～ 続く ～

三、呪いのペンダント（後書き）

気付いた。別に短くてもよくね？↑

投稿ペースが遅いし駄文だし、もう私ダメダメじゃんotz

短くしたのに長いつてどうよ（）氏

四、出発（前書き）

口調や呼び方が違う可能性があります。ご了承ください。

四、出発

桃の花の香りが肺いっぱいに満ちる。風が少女の長い髪をなびかせ、淡い、あたたかな白い光があたりに満ちていた。

——小梅

小梅は聴きなれた鈴の音のような声に顔をあげた。

『聖地！封印されたって・・・大丈夫？頭とか痛くない？』

シヤラシヤラと鈴が転がるような音が聖地中に鳴り響く。その心地いい音が聖地の笑い声だということに気が付いたのは、神子としての才能が開花してしばらくたったころだった。

——心配しないで 僕は大丈夫だから

幼いときから聴いてきたその声に、黒髪の少女は力が抜けたように座り込んだ。桃の木に寄りかかり、たわわに実った桃の実を眺める。

『ねえ、京国はどうなったの？』

——米国に降伏したよ もうすぐ正式に米国の一部になるみたいそう、と、力なく言葉を返した小梅に、聖地は心配そうに声をかける。

——あ、安心してよ 民は何もされてないから 王はちょっとお疲れ気味だけだね

突然冷たく強い風が吹いた。

——そろそろ時間みたい または話そうね

『まって！まだ行かないで！！』

暗くなっていく景色に、小梅は腕を伸ばした。

「まって！！」

時間を少しさかのぼろう。がばつといきなり上体を起こした小梅に、びくりと兄たちの視線が集中した。

「大丈夫ですか？」

小梅は何も言えず、ただこくりと頷いた。

今まで一度も城の外に出たことなどなかったのに、いきなり放り出され、国は敵国の手に落ちた。この世のどんなものより心を許せる聖地とは自由に話すこともできず、信頼していた兄には裏切られたらしい。不安と絶望に胸を押しつぶされそうだった。

そんな小梅をよそに、香は放置されていた武器の中からトンファを取り上げた。これが使えるのは香だけである。彼は顔をしかめた。

「これ俺のつすよね。術使いにくいんですけど」

「仕方ないでしょう。シナティさんも忙しかったのでしょうから」
そついいながら菊はフード付きのローブを着た。菊、勇洙、香、小梅、それぞれの分用意されており、旅に必要最低限のものが入っていると思われる鞆も人数分あった。

「菊、これからどこにいくんだぜ？」

勇洙も準備をし始める。刀を手取る勇洙に、小梅も準備を始めた。

「どうしましょうかね。まずここがどこかわかりませんし・・・」

「あ、それ地図じゃね？」

香が小梅のローブのポケットに無造作に突っ込まれている紙を指す。

小梅は丸められた紙を開いた。そろそろと集まった兄弟たちにも見せる。むんむんと漂ってくる異界の魔術の臭いに頭がくらついた。
「うわっ、すつこいレア物じゃないすか」

「シナティさんと耀さんが作った地図ですね」

少し黄ばんだ、いかにも、といった紙の上に白い小さな光が浮いている。これはシナティの元いた世界の魔法を耀が改良して作ったものだ。現在地が自動でわかるという便利機能の他に、世界地図から各国の都市の地図まで見ることができる。さらに、目的地への方角までわかるという優れものだ。もっとも、二枚しか作られていな

いので、その存在は空想上のものとしか思われていない。

「俺はじめて見たんだぜ」

「使い方わかるの？」

「簡単な魔力の操作でできるな」

そういうと、香は地図の上でさつと手を動かした。するとどうだろう。世界地図がぼやけ、光が指す位置がよりわかりやすくなった。

「ここは・・・独国との国境の近くですね」

「んじゃ決まりなんだぜ！！独国めぜしてレッツゴーっ！！なんだぜ」

勝手に歩き出した勇洙に香が付いていく。

「ちよつと待つてよ！独国っていつても・・・」

このまま京を出てしまうのだろうか。京の街すらまともに見たこともない小梅にとって、隣国である独国も未開の地だった。それに、どこか心苦しい。

「ぶつちやけ、ここでうじうじしてても意味無いみたいな？」

「そうなんだぜ。仕事とかしなくていいし、俺じつとしてるの嫌いなんだぜ」

困惑する小梅に菊は笑いかけた。

「大丈夫ですよ。小梅、行きましょう」

「でも・・・」

不安げに首都の方を見やる。聖地と兄が心配だった。

「香の言うとおり、ここにいても仕方ありません。独国経由で土国へ行きましょう。土国王は私の友人です。きつと助けてくれる」

いろいろと決意したような菊の瞳に、小梅はこくりとうなずいた。

一陣の風が吹いた。

歩み出した四人は、漆黒の髪を揺らして南へと進む。

その胸に宿すは不安に悲しみに絶望、そしてほんのわずかな期待と希望。

彼らは進む。

彼らには、定められた運命の路を歩き続ける他にはないのだから

…

く続くく

四、出発（後書き）

厨二全開www

トンファ―は私の趣味www

いや、ね。どうしても持たせたかった（氏

所詮元ネタは授業中の夢だし、妄想の産物だしwww
前回カットした部分。切ってよかった（＝ワ＝）

五、待ち合わせ場所（前書き）

口調や呼び方が違う可能性があります。ご了承ください。
このシリーズはこの世のあらゆるものと関係ありません。

五、待ち合わせ場所

「わあー！！すごいヨー！！菊兄、あれ何？これは？？」

関所を越え、一番近い町に着いた。一晚野宿した末の初めてみる街だ。小梅は見るもの全てに興味を引かれ、ひっきりなしにあたりを見回している。

「小梅、引つ張らないでください！」

小梅に腕を引かれ、菊は苦笑しながら勇洙と香に助けを求めるが、二人は目を逸らして出店の商品を眺めるふりをした。

「俺、ちよつとどこそこ行つて来るんだぜ！」

「勇洙！待ってください！」

「日暮れにここに帰ってくるからお迎えよろしく！なんだぜ」

「勇洙！！」

人ごみの中に消えて行く勇洙に菊が静止の声をかけるが、すぐに見えなくなってしまった。

香も手を頭の後ろで組み立ち去ろうとする。

「んじゃ、俺もそういうことで」

「そうは行きません」

菊は小梅につかまれているいないほうの手で香の肩をがっしりとつかんだ。

「香、小梅をお願いします」

「えー？！困るっす。俺これから用事が・・・」

「私もあるんです」

顔を寄せ合つて譲らないふたりに、小梅はポコポコけむりを出して怒った。

「私、ひとりで大丈夫ヨー！」

兄二人は小梅を少しの間じっと見つめると、溜め息をついて再び顔を合わせた。

「香、お願いします。私はこれから土国に連絡を取らねばなりません」

「小梅といっしょでもノープロブレム的な」

菊は困ったように眉をハの字にすると、小梅をちらりと盗み見て小声で言った。

「小梅に“外”を見せてやりたいんです」
「っ・・・」

目を輝かせて出店を眺める小梅。彼女は生まれて数百年、京の城の城壁の外に出たことがなかったのだ。神子である故に、様々な利用価値があるのだから当然といえば当然である。

香は言葉に詰まった。

「小梅、香と一緒に見て回って下さいね」

「えー、菊兄とがいい」

「すみません。たくさん土産話をして下さいね」

「はい！」

「それでは、香、小梅、気をつけてくださいね。知らない人に付いて行かない、怪しい店には入らない、それとお金は使いすぎないようにして下さいね。これからたくさん必要になりますから」

「わかつてる的な」

「菊兄お母さんみたいヨー」

「なっ！」

「勇洙といっしょで日暮れにここで合流するっす」

「いつてきまーす！」

二人並んで人ごみに消えていくのを見ると、菊も連絡をしに行くために歩き出した。

く 続くく

五、待ち合わせ場所（後書き）

だいぶ間があきましたねwww

ごめんなさい（氏

というか、キーボードがちょっとやばいです（泣）tとかwとか強く押さないと反応してくれない（泣

これからも私はフリーダムにやっていきますので、あしからず（氏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5868p/>

A P H ~ 王記 ~

2011年10月8日07時56分発行